
果て無きクロニクル

曙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

果て無きクロニクル

【Nコード】

N7269G

【作者名】

曙

【あらすじ】

今より遙かな未来。現文明が滅びた後の世界。人々は再び自然と調和し、また新たに国を立ち上げ暮らしていた。

始まりは嵐の後に

その日は嵐だった。

吹き荒ぶ暴風に煽られ、降り注ぐ雨粒は豪雨となり、村の人家の壁に叩きつけられる。

木々は揺れ、川は荒れ狂い、それらは嵐の威力を如実に物語っている。

前日に到来した嵐は、とうとうこの日は去らず、結局夜になってしまった。

こんな時、人々は雨の恵みに感謝しながらも、作物は無事だろうか、明日は晴れるだろうか、と各々の気持ちを胸に雨風から逃れるため、家の中へと籠りきりになる。

村の外れの家屋に住む少女もその中の一人だ。

可愛らしいと言うべき顔立ちと、肩口まで伸びた髪が特徴的な、年の頃十六、七歳のその少女は、暖かい囲炉裏の前に座りながらも、しかしその瞳は家の中には向けられていない。

少女の瞳が向けられるのは、そこからでは見えるはずのない雲に覆われた大空だ。

「そんなに外が気になるかい？」

少女にかけられるしわがれた声。

声の主は少女の正面、囲炉裏の反対側に座る老婆だ。

「えっ？な、何？お婆ちゃん」

「ふう。やっぱり聞いてなかったんかい」

老婆は少女の返答に嘆息する。

「そんなに外が気になるかい？ 香葉カヨや」

その少女、香葉の返答は今度はしっかりとしたものだった。

「うん。明日は晴れるかなって」

それに対し、老婆は明朗に言い切る。

「止まない嵐はないさね。明日晴れずとも、いずれは晴れるさ」

「うん…そうだよね」

「そうさね」

会話が途切れ、少女の瞳は再び見ることでできない大空へと向けられる。

老婆もそれにならうように、視線をあげた。

そして、ひとり呟く。

「明日は晴れるさね」

呟き声を消すように、嵐は雨粒を降らせ続ける。

出会い

前日までの嵐は夜中の内に過ぎ去り、朝になってからはそれまでが嘘のように晴れ渡っていた。

降り続いてきた雨によって洗われた空気は澄みわたり、久しぶりに顔を覗かせた太陽の光が、普段より眩しく感じられる。

それは人が滅多に立ち入らない森の中だとなおのことで、そのため生い茂る木々の間には一種の神々しさが漂っているようだった。

「もう、お婆ちゃんったら急に薬草を取ってきてくれなんて」

その森の中を、呟きながら歩く人影がひとつ。

厚手だが簡単な作りの着物纏い、手に籠を持ったその人影は、口調とは裏腹に足取り軽く進んで行く。

「今日はいいいお天気だから、お洗濯したかったのに」

愚痴をこぼしながらも、やはり嫌そうな様子は見え、むしろ笑顔を浮かべる少女は香葉だ。

「もう、仕方がないなあ、お婆ちゃんは」

変わらぬ笑顔で目指すのは、頼まれた薬草の自生する場所だ。

日常で使われる薬の類いは、ある程度商工業と交通が発達した集落なら、買うことも可能だが香葉の村ではそうはいかない。

村の中で物の売り買いはなく、他所の集落に売りに出すような製品もない。さらに、交通なんて言葉はどこ吹く風。もっとも近くの村まで、馬車で悪路を二日間かけて進まなくてはならない。

だから、香葉の住む村の住人は必要なものがあれば、自分たちで調達するしかないのだ。

香葉もそれがわかっているので、特に文句はない。あるとすれば、絶好の洗濯日和を逃すことぐらいだが。

むしろ、遊びに行くことができる、逆に嬉しいくらいだった。

雨粒で濡れた下草を、踏み分けながら進むこと十数分。

「到着〜！」

ようやく目的の場所に到着する。

そこは、森の中の少し大きめの広場。幼い頃に遊んでいて見つけた、秘密の場所の一つだ。

「さてと、お婆ちゃんが欲しがってたのは…」

香葉は広場にしゃがみこみ、生えている野草を物色しはじめる。

実は、この広場に生えている野草はほとんど薬草の類いなのだ。

たまたま様々な種類の野草が群生しているこの場所を見つけて以来、香葉は度々森に入っては利用させてもらっている。

「えっと、傷に効く薬草に、気付く薬になる薬草。それから…」
種類と数を確かめながら野草を詰む手に淀みはない。

香葉からしてみれば、この森は自分の庭も同然。

何度か訪れた場所なら、どのあたりにどんなものがあるかはすぐわかる。

必要な野草を、必要なだけ揃えると持ってきた籠の半分が埋まってしまった。

「よしっ！完了っ、と」

グツと大きく伸びをする。

と、不意に川のせせらぎの音が耳に入ってくる。

しばしその音に耳を傾け、そして、

「少し休憩していこうかな？」

広場からさらに十分ほど奥に進むと、川がある。

香葉は休憩がてら、久しぶりにそこに来ていた。

ここ数日の雨で、川は荒れているかと思いきや、その流れは幼い頃

の記憶と同じく澄んだ水が穏やかに流れていた。

「ふっ」

香葉は適当な場所を見つけて、腰をおろした。

そして、何をするでもなく川の流れを見つめる。

変わらない流れを見つめ、変わらない風景を見つめ、

変わったものを見つけた。

「なんだろうっ?」

身を乗り出して見つめる先。川の上流から何かが流れてくる。

それは、黒い色の大きいと思われる物体。

近づくとつれて、それが人と同じくらいの大きさだとわかる。

さらに近づくとそれが人と同じく形をしているのがわかった。

「えっと…人みたいなの…」

それが目の前に来たとき、人そのもの、それも男だとわかった。

呆然とする香葉の前を、その黒い人がゆっくりと流れて行く。

しばらく行ったところで、香葉が我にかえった。

「大変！」

香葉は素早く着物の帯に手をかけると、あっという間に脱ぎ去り、黒い人を助けるべく川へと飛び込んだ。

目覚め

「……………っ！！」

悲しみや怒り、焦りの感情に責め立てられて、男は目を覚ました。

何か悪夢を見ていた、ような気がする。

気がする、とは目を覚ました瞬間にそれらの記憶が霧散してしまい、今では全くと言っていいほど覚えていないからである。

ただ、燃えるような怒りと後悔に似た悲しみ、そして何かに焦っていたことだけは覚えていた。

「当たり前か…。それで目が覚めたんだから…」

独り呟くと男は改めて周囲を見回す。

どうやら、何処かの部屋の中にいるらしい。

格子状の窓の外には、美しい星空が見ることができ、そこから時刻が真夜中近いことがわかる。

板張りの床、その丁度部屋の中心にあたる場所に作られた囲炉裏には火がくべられており、その明かりが優しく部屋の中を照らし出していた。

火に照らされた部屋の中は、余計な物など一つもなく、そこかしこに生活用品がしまわれてある。

横たわっていると、自然に視界に入ってくる梁と天井の高さから、この建物があまり大きな建物ではないことが容易に想像がつく。

そして、自分の傍ら、肩のすぐ横の辺りには少女が一人、板間に座ったまま眠っていた。

「すう…」

おそらく年の頃は十六、七歳。肩口まで伸ばされた髪と可愛い顔立ちが特徴的な少女が、気持ちよさそうに寝息をたててた。

男は周囲の状況から、少女は意識を失った自分を看ている内に、眠ってしまったのだらう、と判断する。

その少女を起こさないよう静かに立ち上がると、男は出入口を見つけて外にでた。

頭上を覆う星空に翳りはない。

「まさか、礼も言わずに出ていく気じゃなからうね？」

そんな星空を見上げる男の背に、しわがれた声がかけられる。

男が振り向いた先、それまでいた建物の入り口に老婆の姿があった。

「いや…そんなつもりはないが…」

慌てる風もなく、老婆の問いに男は平然と答える。

「じゃろつて。そんな格好ではどこにもいけんだろつからなあ」

言われて初めて、男は自分の体を見回した。

その身につけているのは、前を合わせて帯で締めただけの薄手の寝間着。

とても、外に出るには不適切な格好だった。

「肌寒いと思つたら、こんな薄い着物を着ていたからか…」

「そうじゃて。風邪をひかんうちに、とつと家の中に入るとええ。起きて出歩いてたのが香葉に見つかると、また騒ぎ出すさね」

そう言つて、老婆は男を手招きする。

しかし、男は動かず何か、考える素振りを見せた。

「何か気になることでもあるのかい？」

いつの間にも移動したのか、老婆は男の隣に立っていた。

「…おかしなことを訊ねるが、貴女は俺が何者か知っているのか？」

口調には、若干躊躇いの気配がうかがうことができる。

そのことに老婆は気付いていたが、あえて気付かないふりをする。

「さあね。お前さんは、今日香葉に川から拾われて来たところだからね。お前さんがわからないんなら、儂らにわかるわけがなかるつて」

言い終わると、老婆は再び男に背を向けた。

男の方かというと、何かを考え込んでいるようだった。

その気配を背中に感じつつも、老婆は何も言うことはなかった。

しかし、家の中に入ろうとした瞬間、男から声がかげられた。

「最後に一つ、いいだろうか？」

「何さね？」

「香葉、というのは…中に眠っていた娘のことだろうか？」

「そうさね。そのようにして、少しでもあの子のことを気にかけるなら…」

老婆は一拍置き、

「思い悩むのもよいが、早く元気になることじゃな」

さらには笑みも浮かべて、

「お前さん、記憶がなくとも幸せ者さね。心配してくれる者があるんじゃからの」

そして最後に、

「悩むのもほどほどにして、早いめに寝るんじゃぞ」

それだけ言うと、家の中に引っ込んでしまった。

「確かに、恩を返したいならそれが一番か……。それに……」

心配されている、と知って悪い気はしなかった。

記憶がないのを自覚して不安になっていたが、それだけで、救われた気もする。

しばらくの間突っ立っていた男は、老婆の言葉を噛み締めながら、家の中へと戻る。

入った時には、すでに老婆の姿はなかった。

別室で眠りについたのだろう。

先ほどまで横になっていた布団まで、男は、香葉というらしい少女を起こさないよう静かに移動する。

ふと、その途中で少女が布団など何も被っていないことに気がついた。

「このままでは、この娘が風邪をひいてしまうな……」

男はあたりを見回し、何かかけてやれるものがないかを探す。

見つけたのは、布団の枕元に置かれた衣類だった。

手にとって見てみると、大きさにどうやら自分の物らしい。

「この娘の父親の物…ということもありえるが…」

そうだとしても自分が使うのではなく、少女にかけてやるのだからよいだろう。

そう判断して、置かれていた衣類の中でも一番大きい物を、少女の肩にかける。

広大な布面積をもつ黒いそれは、外套だった。

少女の体には、かなり大きいようだったが、気にせず男は布団に入る。

目を閉じて眠ろうとするが、やはり一つのこと気がなくなってしかなかった。

「俺は…何者なんだ…」

咳きは誰に聞かれることもなく、夜の空気に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7269g/>

果て無きクロニクル

2011年1月19日03時39分発行